会員便り

忘れ得ぬ名歌・辞世歌(一)

古藤田　太

（会員　弥生町江良）

平素新聞や読書の間、フト出会って感歎した短文や短歌など書き留めております。それもここ数年のことで、膨大な量ではございません。佐伯史談の一つのカラーとして投稿したい。間違いもあるかも知れません。御高配を願います。

(1)　石垣原の戦で吉弘統幸の辞世歌

あすは誰が草の屍やてらすらん
石垣原のけふの月影

黒田如水は別府実相寺に陣を張り、大友方の雄将吉弘嘉兵衛統幸は観海寺高台に陣をおいた。慶長五年九月十日の前夜、吉弘統幸は覚悟の歌を書き置く。大友軍の不利は日を追うてあきらかとなる。十日の総攻撃に力尽き腹かっさばき果てた。

私はこの歌に出会う度、大友氏の終焉をさびしく感じてやまない。

(2)　川路聖謨（としあきら）の辞世歌

天つ神に背（そむ）くもよかり蕨（わらび）つみ
飢えし昔の人をおもへば

聖謨は享和元(一八〇一)年四月二九日、日田の日田代官所手代内藤吉兵衛歳由の長男として生まれ、文化の初め頃一家を挙げて江戸に移り住む。一七才で勘定所採用試験に合格。二七才寺社奉行、四〇才佐渡奉行、五一才大坂町奉行　五二才勘定奉行に栄転。五三才海防掛を兼務、長崎でロシア使節プチャーチンと応接し、翌年下田で日露和親条約調印、五九才で隠居し公職を退く。六三才再び外国奉行に起用されたが、老令を理由に三ヶ月で辞任。六四才中風となり、左半身自由を失う。慶応四年三月一五日、自宅でピストル自殺。

（歌の大意）飢えし昔の人とは、中国殷（いん）の時代、名ある臣「伯夷と叔斉」の兄弟は国が亡びたが、二君に仕えることを潔よしとせず、周の国の粟を食することを恥じ、深山に隠れ蕨（わらび）を食し餓死したという故事。この故

事になぞらえて明治の世に生くることを避け、徳川政権崩壊に殉じ、明治の新時代に生きることを拒否したものという。

殷墟は中国河南省安陽県に在るが、ここが王都らしく、中国の青銅器文化に大きく貢献。江戸時代、既に殷の文化が知られていることは驚きである。

(3) **大老井伊直弼彦根藩主の歌**

さきがけし猛き心の花房は
散りてぞいとど香に匂いぬる

この歌は三月三日、暗殺される前日につくられたものらしく辞世歌では無い。近江彦根藩主大老井伊直弼は勅許を待たず安政五ヶ国条約に調印、将軍家定の後継者を慶福(後の家茂)と決定、一橋慶喜を将軍職に推す等の外交政策に反対する一橋派を押え、安政の大獄を起したこと等で、江戸城桜田門外で、水戸・薩摩の浪士十八名によって暗殺された。

(4) **細川忠興夫人たまの歌**

散りぬべき時知りてこそ世の中の
花は花なれ人も人なれ

細川ガラシャ(本名たま)は明智光秀の三女。慶長五年七月、石田三成が家康打倒の兵を挙げると大坂方は、家康の会津遠征に従った諸大名の妻を人質として大坂城内に移そうとしたが、ガラシャはこれを拒否した。(続く)

川名のルーツ

◆大分(おおいた)川　遠く湯布院町の水分峠から発し、別府湾に注ぐ大川。大分とは古くは碩田(おおきた)と書き、大きい田の意。一説には豊前と豊後に大きく分けたことによるという。

◆山国(やまくに)川　名勝・耶馬溪(やばけい)に発し、沖代(おきだい)平野をうるおす。耶馬溪は山さかしいところで、古くから山国という。耶馬の名も頼山陽が「山」からとった。江戸時代は河口近くの村名から高瀬川。古くは御木(みけ)川という。八幡宮の造営用材を河流に乗せたためとか。流域をミケ郡とし、のち上下に分割、上毛(かみつみけ)、下毛(しもつみけ)と呼ぶ。いま下毛は郡名として残り、シモゲと読む。三毛門(みけかど)の地名もある。ミケはさらに考える余地があろう。

◆山移(やまうつ)り川　耶馬溪熔岩台地を割って流れる川で、両岸に高い岸壁を連ねる。山のウツ(渓谷)ウツロ(崖・洞)に起源を持つか。深耶馬溪の景勝地である。

(『日本全河川ルーツ大辞典』)